

関西経済

Kansai Economy

潮流深層 NEWS

老舗の技 工芸・文化財に

京都力

アロマ

多くの仏教宗派が本山を置く京都の伝統産業、京仏壇・京仏具が転換期を迎えている。ライフスタイルの変化や寺院離れによって需要が低迷する「厳冬の時代」に立ち向かい、老舗の業者が新たな挑戦を始めている。(西田大智)

「気分をすっきりさせたい、リラックスしたい。こんな香りがあればいいな」。土壁にアロマの香りを漂わせた空間で、アロマワークショップの講師・橋本律子さん(54)が語りかけた。

創業90年を超える仏具製造卸「作島」(京都市下京区)が昨年、社屋1階の事務所を改装してオープンさせた「遊戯キョウト」。心身を穏やかに整える方法として話題の「マインドフルネス」に関連したグッズの専門店だ。作島寛社長(60)は「いい仏壇仏具を作っても、大きいもの、価格の高いものは売れない。手が込んで掃除しやすいものも売れない」と嘆く。「故人の供養のためという印象の強い仏壇仏具だけでなく、今生きている

京仏壇、京仏具業者の挑戦

小堀	納骨壇の製造販売事業など
作島	マインドフルネス関連の専門店オープン
関崎	灯具照明器具の新ブランド立ち上げ
若林佛具製作所	インバウンド対応の店舗改装、文化財修復事業など
田中伊雅佛具店	商品カタログのネット掲示など



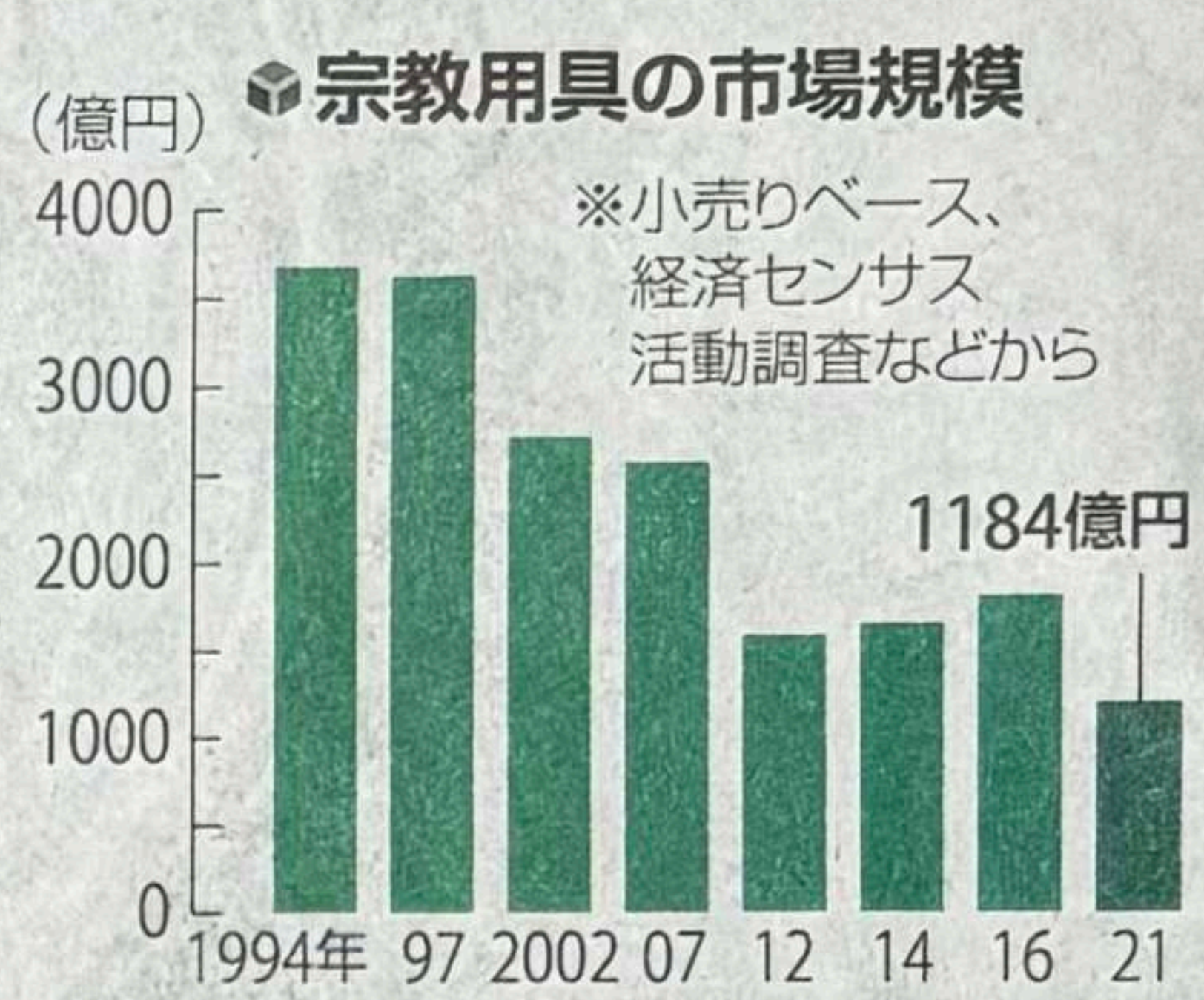
「遊戯キョウト」の一角で、好みのアロマをつくる参加者。店内には、香りのグッズや線香、優しい音色を出す鳴り物などが並び(京都市下京区) 川崎公太撮影

仏壇・仏具 イメチェン挑む

人に寄り添いたかった」と挑戦の理由を語る。ワークショップでは、京の名刹、大徳寺塔頭・総見院の境内で出た杉の間伐材から抽出した精油をベースにヒノキやユズ、レモングラスといった自然由来の精油を調合して、好みの香りのルームスプレーなどを作る。参加した兵庫県西宮市の主婦池田清美さん(53)は「リラックスできる香りができた。最近増えている外国人観光客にも受けそう」と話した。

30年で7割減

国の調査では、1990年代



には3600億円を超えていた仏壇・仏具といった宗教用具の年間販売額は、2021年には1184億円にまで減少。この30年で7割近く縮んだ。国の伝統的工芸品に指定されている京仏具、京仏壇も例外ではない。第2次世界大戦後、寺院の復興に支えられ、高度成長期には地方から都市に流入した人々向けの旺盛な需要に応えた。それが、「売り上げは、80、90年代の半分以上」と嘆く業者もいる。



職人の遊び心があふれた工芸品の並ぶショールーム。若林社長は「ここから新たな発信をしていきたい」と語る(京都市下京区)

仏具製造の技術を生かして作られた照明器具(いずれも関崎提供)



寺院も運営が厳しくなり、本山に近いことで、各地の所属寺院にまで仏具を販売していた京都の強みが生かせない。京都府仏具協同組合(下京区)の加盟事業所がこの10年で3割近く減り、約130事業所になった。

多角化

1830年創業の仏壇店「若林佛具製作所」(下京区)は、京都駅に近い七条通に面した本店ビル1階のショールームから7年前、看板商品だった金仏壇をなくした。ガラス張りの店内には、金箔をあしらった財布や小銭入れ、漆塗りのぐい飲み、截金や時給のアクセサリなど仏壇の技術を転用した多彩な工芸品、マンションのインテリアにも合う家具調の仏壇が並ぶ。

仏壇店とは思えない売り場だ。「外国人の観光客でもふらふら立ち寄れる店にしたかった」と若林智幸社長(57)は笑った。仏壇以外のニーズをつかもうと、大胆な改装に踏み切った。パオニア的な存在だ。

伝統的な仏壇や寺院仏具の先細りを見据え、ネット通販や文化財の修復事業など多角化を進めてきた。若林社長は今、社の使命を「多くの家庭や人々に手を合わせる空間を提供すること」と強調する。「故人と対話し、自身を省みる空間は、どんな時代、世代でも必要とされる。新たなものを提案していく」と前を向く。

100年は持つ

密教法具の「五鈷杵」など金属の仏具製造を得意とする、1930年創業の「関崎」(下京

区)は、灯具照明器具のブランド「関蔵SEIKIZO」を立ちあげた。昨年12月に開設したショールームには、職人が手作りした重厚感のある製品が並び、寺院はもちろん、ホテルや美術館、商業施設などへの売り込みを図る。

「仏具と同様、100年、200年は軽く持つ」と、関崎弘和社長(59)は胸を張る。きっかけはある寺院の注文だった。書道教室としても使う本堂で手元が見える明るさがあり、折りの場としての雰囲気も壊さない照明がほしい。

試行錯誤の末に完成させたところ、職人たちのやる気につながった。「仏具が売れず職人がいなくなれば業界はなくなる。照明器具でも、うちの技術なら十分に太刀打ちできる」と力を込める。

府仏具協同組合も仏壇・仏具のネット展示会を開いたり、美術系の大学と連携して新たなデザインの商品開発をしたりと知恵を絞る。

新たな挑戦にはどのような視点が必要なのか。京都精華大学の米原有二・伝統産業イノベーションセンター長は「京都の仏壇仏具は、いつの時代も過去に学び、新しさを生みだしながら、折りのための精神性の高い物づくりを誇ってきた。そうした技術で何かを作る際には、業界の歴史や精神性がどう生かされているのか、言葉を尽くして伝えることで、新たな価値の創造につながる」と期待している。

平安期に源流

京仏壇は一般に、漆塗りに金箔を押しした家庭用の伝統的な「金仏壇」を指し、京仏具は仏像や燭台、梵鐘など仏教に用いるあらゆるものを含む。仏具の歴史は、6世紀の仏教伝来に端を発し、京都では平安時代の11世紀、仏師・定朝による工房「七条仏所」で本格的に始まったとされる。仏具の技術を生かして作られるようになった仏壇は、江戸時代に需要が高

まったという。各宗派の本山がひしめく京都では、全国の寺院向け仏具の6、7割を生産しているという。仏壇では、木で本体を成形する木地や木彫刻、漆塗り、表面を磨いて光沢を出す蠟色、蒔絵、彩色、金箔押し、鍍金具の製作、組み立てなど、多岐にわたる工程の職人が支えている。京仏壇、京仏具のほか、国の伝統的工芸品に指定された仏壇は広島仏壇、彦根仏壇(滋賀県)など全国に14産地、仏具は尾張仏具(愛知県など)がある。

ニュースファイル

阪急 新型車両お披露目



阪急電鉄は16日、京都線(大阪梅田-京都河原町)に導入する新型車両「2300系」を報道陣に公開した。写真左。阪急が新型車両を投入するのは11年ぶりとなる。

伝統の「マールンカラー」を踏襲し、最新の制御装置を導入して走行に必要な電力を最



大で6割減らしたという。1編成8両のうち、1両は今年7月に始める有料の座席指定サービス「プライベート」の専用車両=同右=。ゆったりとした座席にコンセントや収納式テーブルを備え、利用には運賃に加えて税込み500円の座席指定料金が必要となる。